

太地（人口約3,900人）

大規模な産業としての捕鯨が発祥したところで、「捕鯨発祥の地」として知られています。太地において、鯨組と呼ばれる鯨捕り集団が組織され、沿岸に回遊してきたセミ鯨やザトウ鯨を捕獲したのが日本の捕鯨産業の始まりだと言われています。17世紀初頭以来、太地は400年に亘る捕鯨の歴史を誇っています。1606年に地元の豪族、和田頼元が手鋸を使った突き捕り式の捕鯨を始め、1675年には頼元の孫、頼治によって網捕り式捕鯨が発明されました。この漁法は西日本の各地に伝えられ、大きな影響を及ぼしました。太地の古式捕鯨は、1878年（明治11年）12月に暴風雨に遭遇し



小型捕鯨船「勝丸」(磯根 嵩氏所有:1987年当時)

大きな痛手を負ったことによって、一旦衰退しましたが、太地と捕鯨との係わりが切れることは決してありませんでした。ノルウェー式捕鯨による近代捕鯨の時代になってからは、多くの太地出身の鯨捕り達が、東日本の他の捕鯨基地や、南水洋の捕鯨船団でも捕鯨に従事し、日本の捕鯨の伝統を、広く日本各地に伝えることに貢献しました。モラトリアムまでは、沿岸大型捕鯨の基地もありましたし、小型捕鯨船は地元ではゴンドウ鯨等を捕獲し、また北方の海域でミンク鯨も捕獲していました。捕鯨は太地の最重要産業であり、町の歴史と文化の根幹をなすものです。捕鯨の最盛期には、町民税の約8割が捕鯨関係者からのものだったのです。現在太地では、磯根嵩氏と太地漁業協同組合が小型捕鯨業に従事しています。また、太地沖で捕獲されているのは、マゴンドウ（和田沖と太地沖で合計50頭の捕獲枠）とハナゴンドウ20頭です。

和田（人口約5,900人）

南房総（千葉県南部）では、1612年以来ツチ鯨漁が行われ、ツチ鯨が伝統的に利用されてきました。「たれ（ツチ鯨の味付け干し肉）」は、地域の伝統食として愛されています。捕鯨基地は最初東京湾の入り口の勝山（現鋸南町）にありました。その後、館山、白浜、千倉、そして和田へと移動し、それによってツチ鯨捕鯨の文化が、南房総全体に広がっていったのです。南房総には400年に亘るツチ鯨捕鯨の歴史と文化が生きています。和田を基地としてツチ鯨操業が始まったのは1948年です。



ツチ鯨解体前の調査活動

また和田には、1987年迄マッコウ鯨やニタリ鯨を捕獲対象とする沿岸大型捕鯨の陸上基地もありました。現在は、外房捕鯨が小型捕鯨業に従事しています。和田沖で捕獲されているのは、ツチ鯨26頭とマゴンドウ（和田沖と太地沖で合計50頭の捕獲枠）です。

網走（人口約42,000人）

網走の捕鯨の歴史は古く、オホーツク文化人が鯨類を利用していたことに遡ります。オホーツク文化は、5世紀から13世紀にかけて、北海道東岸の礼文島から根室に至る沿岸地域に発達し、人々は漁業や海獣狩猟に基づいた生活をしていました。オホーツク文化人が捕鯨を行っていたことは、根室の弁天島貝塚から発見された骨器に小船で鋸を用いた捕鯨の様子が描かれていることに顕著に示されていますが、網走においてもモヨロ貝塚遺跡からオホーツク文化期のものと思われる鯨骨製品が多数発見されています。その後北海道各地において、アイヌによる捕鯨が行われまた江戸時代には網捕り式捕鯨が試みられました。近代になってノルウェー式捕鯨が採用されてからは、1915年に網走にも沿岸大型捕鯨基地が設立されました。戦後は、食糧難に対処するため、北海道全土で捕鯨がお



モヨロ貝塚

こなわれ、また網走においては小型捕鯨も始まりました。捕鯨に従事した人々の中には、西日本の伝統的な捕鯨地域の出身者達が大量おり、彼等を通じて長い歴史にはくまれた捕鯨文化が網走にも継承された訳です。IWCの決定によって次第に捕獲枠が縮小され、やがて商業捕鯨が停止されていく中で、北海道の捕鯨基地は次々と閉鎖されましたが、網走には現在も、現役の捕鯨業者である三好捕鯨と下道水産がミンク鯨操業の再開を待ちわびています。オホーツク海には、今も昔も沢山のミンク鯨がいますが、IWCのモラトリアムの為に捕獲することができません。網走の捕鯨の灯を消さない為に、三好捕鯨と下道水産は、現在ツチ鯨2頭を網走に水揚げしています。

函館

平成11年（1999年）から日本海のツチ鯨を対象として年間8頭捕獲するようになりました。

鮎川

鮎川は、宮城県の大鹿半島の先端に位置する、大鹿町（人口約5,500人）の一部です。鮎川の捕鯨の歴史は、江戸時代末期に網捕り式捕鯨が試みられたことに遡ります。その後、ノルウェー式捕鯨を導入した近代捕鯨の時代になってから、1906年に沿岸大型捕鯨の基地ができたことにより、鮎川の捕鯨の歴史が本格的に発展しました。捕鯨に従事するために、西日本各地の捕鯨関係者が鮎川にやってきて、先祖伝来の生業を続け、これによって古くからの日本の捕鯨文化が鮎川に受け継がれました。鮎川ではマッコウ鯨を主な捕獲対象とする沿岸大型捕鯨と共に、沿岸小型捕鯨によるミンク鯨漁が行われてきました。三陸沖は、オホーツク海、道東沖と並ぶミンク鯨の好漁場で、昔も今も沢山のミンク鯨がいます。しかし、「いくら沢山いても、とにかく1頭も捕って駄目！」というIWCのモラトリアムの前に、小型捕鯨業者

は、健康で美味しいミンク鯨の肉を、地元の人々に安定して供給するという祖先から受け継いだ使命を果たせないことによる精神的苦痛を抱えているのです。IWCのモラトリアムによって、町は多大なる打撃を被り、人口は激減し、かつ高齢化が著しく進んでいます。その解決のためには、ミンク鯨の捕獲を再開することが急務なのです。現在、鮎川では、戸羽捕鯨、星洋漁業、日本近海が小型捕鯨業に従事しています。鮎川沖で捕獲されているのは、ツチ鯨26頭とタッパナガ50頭です。



大鹿町の鯨祭り



沿岸小型捕鯨に関する政府の規制 平成13年度（2001年度）			
小型捕鯨船	9隻	捕獲枠	0頭
操業許可船	9隻	ミンク鯨	0頭
実際に稼働している船	5隻	ツチ鯨	62頭
第75幸栄丸(鮎川)、第28大勝丸(鮎川)、第7勝丸(太地)、第31純友丸(和田)、正和丸(太地)		ゴンドウ鯨	100頭
船の大きさ	48トン未満		(南方系のマゴンドウ50頭、北方系のタッパナガ50頭)
漁期と漁場		ハナゴンドウ	20頭
鯨種	漁期	漁場	操業船
ミンク鯨	4月1日～9月30日	網走沖、鮎川沖、道東沖、モラトリアムにより停止中	
ツチ鯨	5月1日～6月30日	函館沖	第28大勝丸、第31純友丸
	7月1日～8月31日	和田沖	第7勝丸、第31純友丸
	7月1日～8月31日	鮎川沖	第75幸栄丸、第28大勝丸
	9月1日～9月20日	網走沖	第28大勝丸、第7勝丸
ゴンドウ鯨(マゴンドウ)	5月1日～6月30日	太地沖	第7勝丸、第31純友丸、正和丸
	7月1日～8月31日	和田沖	第7勝丸、第31純友丸
	9月1日～9月30日	太地沖	第7勝丸、第31純友丸、正和丸
(タッパナガ)	10月1日～11月30日	鮎川沖	第75幸栄丸、第28大勝丸
ハナゴンドウ	5月1日～6月30日	太地沖	第7勝丸、第31純友丸、正和丸
	9月1日～9月30日	太地沖	第7勝丸、第31純友丸、正和丸

日本の沿岸小型捕鯨は、伝統的に持続的利用を目指して、科学に基づいた管理体制の下、資源量の豊富な鯨種の捕鯨だけを求め続けます。

ミンク鯨操業の再開に向けて

日本の沿岸小型捕鯨

日本の小型捕鯨業者は、長年に亘って主としてミンク鯨を捕獲してきました。商業捕鯨が停止される以前は、年間平均で348頭のミンク鯨を捕獲していたのです。しかし、ミンク鯨は絶滅の危機に瀕していないに関わらず、昭和63年（1988年）捕獲が停止されてしまったのです！現在小型捕鯨業者は、年間ツチ鯨とゴンドウ鯨合計で180頭程の捕獲枠しかありません。ミンク鯨操業再開に向けて生き残りのため様々な経営努力を続けてきました。

生産コスト削減のため稼働船を5隻へと減らざるを得なかったのはその一例です。ミンク鯨は昔も今も資源豊富です。最近では、むしろミンク鯨が増えすぎて他の魚類を大量に食べるため水揚げ量が減っていると沿岸漁民が訴える程になっています。商業捕鯨停止から今年で15年。小型捕鯨業者、そして鯨の町の人々にとってミンク鯨操業の再開は悲願であり、IWCへの憤りは限界を超えつつあります！